



未来につなぐ 笑顔かがやく 元気まち上士幌

上士幌町



上士幌町基礎データ

総人口	4,805人 (R5年8月末現在)	製造品出荷額	7,600百万円 (R3経済センサス)
高齢人口（高齢化率）	1,661人 34.6% (R5年8月末現在)	卸・小売年間販売額	11,299百万円 (R3経済センサス)
世帯数	2,572世帯 (R5年8月末現在)	一般会計規模	9,125,355千円 (R5当初予算)
人口密度	6.9人/㎢	町の木	しらかば
面積	696㎢	町の花	すずらん
農業産出額	23,823百万円 (R4市町村別農業産出額)	町の鳥	かつこう

上士幌町の紹介



上士幌町市街地と熱気球

十勝地方の北部・大雪山国立公園の東山麓に位置している上士幌町は、南北48km、東西18.2kmで696㎢の面積を有しており、そのうち約76%を山林が占めています。

地勢は南部と北部で大きく異なり、市街地のある南部は比較的平坦な丘陵性の地形であり、郊外には防風林と農地が広がる一方、北部は日本二百名山に選定されているニペソツ山や北海道大分水点のある三国山など、東大雪の山々が連なる山岳地形となっています。

まちの歴史は明治40年に安村治高丸らが開拓を始めたことにはじまります。大正15年に帯広駅から上士幌駅まで士幌線が開通すると、

入植者は増加し、昭和6年には士幌村（現士幌町）から分村、士幌村の川上に位置していたことから上士幌村となりました。

昭和29年には町制が施行され、現在の上士幌町となりました。昭和28年に開始された糠平でのダム・発電所の工事や昭和29年の洞爺丸台風による風倒木の処理のため作業員やその家族らが糠平や三股地区を中心に移住したこともあり人口は増加し、昭和30年の国勢調査では人口が13,608人とピークを迎えましたが、その後の人口は減少の一途をたどり、平成27年の国勢調査では4,765人と、ピーク時と比較して約65%減少しました。



上士幌町認定こども園 ほろん

平成26年にふるさと納税の寄付金を活用した「上士幌町ふるさと納税・子育て少子化対

策夢基金」を創設し、認定こども園の10年間の完全無料化や18歳以下の医療費助成など、他の自治体に先駆けて実施した子育て支援・少子化対策や、官民一体で取り組んだ移住定住の促進などにより、直近の国勢調査において65年ぶりの人口増加となりました。

北海道バルーンフェスティバル

上士幌町は、日本で初めての熱気球の競技大会が開催された、「熱気球のまち」として知られています。

熱気球の離陸・着陸地には広大な土地が必要となるため、国内の他の地域では水田に水が張られる前の5月や、い草の収穫が終わる10月などに熱気球大会が行われますが、上士幌町では秋まき小麦の収穫が終わる8月に開催されます。十勝の夏空を熱気球が彩るイベントは、北海道の夏の風物詩といっても過言ではないでしょう。



第50回北海道バルーンフェスティバル

第1回の熱気球フェスティバルは1974年に開催されました。これは洞爺湖付近で日本初の熱気球が飛んだ7年後のことで、自作した5機の気球と68名が参加しました（初日に飛行したのは4機）。当時、日本国内で熱気球を知る人は少なく、それは家畜も同様でした。空を飛ぶ大きな物体を目にした牛たちは驚き、脱糶した乳牛が農地を荒らしてしまうこともしばしばで、そのたびにバルーンストたちは農家を訪れては謝罪することを繰り返したそうです。

回数を重ねるごとに参加気球は増え、1976年の第3回大会からは競技も行われるようになりました。近年では2010年の第37回大会が口蹄疫のため、2020年の第47回大会・2021年の第48回大会が新型コロナウイルス感染症のため中止となりましたが、2022年の第49回大会は感染症対策を講じて開催し、2023年、第50回の節目を迎えることとなりました。4日間にわたり開催された第50回北海道バルーンフェスティバルには全国から集まった63機の気球と、約46,000名の来場者を迎え、大いに賑わいました。

旧国鉄士幌線と糠平湖

かつて、帯広駅から十勝三股駅までを結んでいた旧国鉄士幌線。当初は石狩山地を超えて上川町までを結ぶ計画でしたが、ついにその計画は達成されないまま、昭和62年に全線が廃止。その役割を国道273号に完全に譲ることとなりました。

廃線に伴って、多くの乗客や木材、農産物を運んでいた鉄路もほとんどが撤去されましたが、上士幌町市街地から旧十勝三股駅までの音更川とその支流に架けられたコンクリート製のアーチ橋梁群が現存しており、北海道遺産や近代化産業遺産に認定されているほか、そのうち5つの橋が国の登録有形文化財（建造物）に登録されています。

なかでも、昭和30年の糠平ダム建設による付替えて鉄道橋としての役目を終えたタウシュベツ川橋梁は、季節によって湖底に沈んだり、姿を現したりを繰り返すため、幻の橋として知られており、季節を問わず多くの観光客が訪れています。

糠平ダムは電力需要が多くなる冬季に対応して発電するため、春先にはダムの最低水位まで糠平湖の水位を下げ、5月以降、雪解け水や雨水を貯水して秋を迎える運用がされています。そのため、例年6月ごろから橋脚が水没し始め、9月中旬から12月下旬頃まで完全に水没、水位が下がり始める1月頃から再

び姿を現すといわれていますが、その年の天候により見られる時期も大きく左右されます。

このように、水の中に沈んだり、分厚い氷から姿を現したりを繰り返すことで、コンクリートの風化が進み、崩壊してしまう日もそう遠くないといわれています。

これからの季節は糠平湖が全面結氷し、ワカサギ釣りやアイスバブル探勝の観光客で賑わいます。また、スノーシューやファットバイクで糠平湖上を横断してタウシュベツ川橋梁間近で見ることができます。タウシュベツ川橋梁へのアクセスや冬期間の糠平湖への立ち入りについては上士幌町観光協会のホームページをご覧ください。



冬のタウシュベツ川橋梁

持続可能なまちを目指して

上士幌町は、令和2年にジャパンSDGsアワードで内閣官房長官賞を受賞、令和3年には内閣府の「SDGs未来都市」「自治体SDGsモデル事業」、さらに令和4年に環境省の脱炭素先行地域（第1回）に選定されるなど、持続可能なまちづくりに向けた取り組みを進めています。酪農業が盛んなまちであるという特性から、家畜糞尿を資源としたバイオガス発電とエネルギーの地産地消を進め、現在では町内6か所計7基のバイオガスプラントが整備されており、理論上は町内の一般家庭と主要な公共施設で消費される電力を賄うことができるまでになっています。

また、ICTの活用にも力をいれています。

上士幌町では平成29年から自動運転バスの実証実験を開始し、令和3年には冬季間の公道における実証実験をするなど、自動運転レベル4の社会実装に向けた取り組みを進めています。さらにはドローンを活用した遠隔地への買い物支援や新聞配達の実証実験、タブレット端末を活用した福祉バスのデマンド化といった移動や物流など住民生活の利便性向上のほか、スマートフォンへの防災情報の一斉送信、AIチャットボットによる問い合わせ対応など、あらゆる分野でICTを取り入れ、行政サービスの質の向上を図っています。

SDGsの目標達成のためには、ハード面の整備だけでなく、私たち一人ひとりが身の回りのこととして取り組む機運を醸成し、行動変容につなげることが不可欠であり、そのための普及啓発活動にも取り組んでいます。たとえば、町職員が認定こども園や学校・企業を訪れて行う出前授業の実施や、世代間交流や身近な課題の解決方法を共有するための「上士幌町SDGs未来都市ワーキンググループ」の立ち上げなど、行政だけでなく、企業や団体、住民参加のもと、まち全体が一体となってまちの価値を高め、まちの将来を担う子どもたちの未来へとつなぐ、持続可能なまちづくりを目指していきます。



小学校での出前授業（年30時間）

上士幌町の四季



【春】第三音更川橋梁



【夏】タウシュベツ川橋梁と糠平湖



【秋】十勝三股の大樹海



【冬】上士幌ウィンターバルーンミーティング